

『就実論叢』第46号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2017年2月28日 発行

大学教育のグローバル化を促進する CLIL

CLIL promotes globalization of university education

中 西 徹

大学教育のグローバル化を促進する CLIL

CLIL promotes globalization of university education

中西 徹 (薬学科)

NAKANISHI Tohru

1. CLIL と第2言語教育

CLIL (Contents and Language Integrated Learning) 内容言語統合型学習は、教科学習に外国語教育を取り入れて、これらを同時に教えることを目指す教育方法である。元来は英語を外国語とする欧州の初等中等教育から始まったもので、1995年に欧州評議会が「母国語 + 2ヶ国語」を習得する欧州人の育成を提言してから欧州各国に急速に広まっていったものである。特に EU 諸国においては、将来のヨーロッパ市民の育成という高い目標等から、高等教育での大規模な人材交流システムであるエラスムス計画 (The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students : ERASMUS) によって、各国の大学間に自由留学的なシステムが適用されていて、学生達はこのシステムによって大変な利益を受けている (現在はソクラテス計画に組み入れられて、約120万人の学生が自国外で学んでいると言われている)。このシステムにおいて、英語を第2外国語とするこれらの国々では、どのように自国語授業への英語の取入れを行っていくかということが共通の課題となっている。そこで、多くの国々がこの CLIL の取り入れを行って、語学専門の授業だけでなく、科目授業、教科授業といった一般の授業への英語の導入を実施しているのである。

(参考) 上記エラスムス計画の概要

- ・ ヨーロッパ内の大学・高等教育機関に在学する学生が、国境を越えて3～12ヶ月、他のヨーロッパ国に移動し、そこで学修の一部を行うことを財政的、学術的、行政的側面で支援する事業
- ・ 単位は欧州単位互換制度 (ECTS) に基づいて、1年間の学修を最高60単位に換算し在籍大学の単位へ読み替える

この CLIL は、いわば教科内容と英語の折衷型、ハイブリッド型授業とも言えるもので、いきなり教員が英語ですべて授業を行うことは、教員にも学生にもハードルが高いことから、授業の一部に何かの形で英語を取り入れて、学生の英語意識を高めて英語的環境を作っていくことを目指している。まさに母国語と英語の統合型学習と言えるものである。では具体的に、日本語環境においてどのようにしてハイブリッド型英語授業を展開するのかという事例

は次項で述べるとして、まずは本家の欧州を代表して、オーストリアのウィーン大学での CLIL の状況をご紹介しますこととしたい。

ウィーン大学はオーストリアの首都ウィーン
の中心、リング通りに面した広大な一帯に
あり、欧州におけるドイツ語圏最古の歴史を
もつ名門大学として知られている。1365年に
ルドルフ 4 世が設立した大学で、2015年には
創立650年の式典が盛大に行われた。15学部
4センターから成る総合大学で（日本では学
科となるものが学部として独立しているので
数が多い）、学生数は約92,000名、教職員は
約9,900名とオーストリア最大の規模を誇る
大学である。物理学者シュレーディンガーら
11人のノーベル賞受賞者を輩出し、教鞭を
とった著名な学者（作曲家ブルックナー、精
神学者フロイト、物理学者ドップラーなど）
や学んだ著名人（作家ホフマンスタール、作
曲家マーラー、歌人斉藤茂吉など）も数多い。

このウィーン大学には、主に EU 圏内から
多くの留学生が学んでいて、4人に1人が外
国人学生であると言われている。大学内には
International Office が設けられていて、学
生が気軽に相談に訪れている。各国の協定大
学のパンフレットも書棚に置かれていて、下
記の日本の大学のものも置かれている。
ウィーンと日本の関係は、音楽などの文化交
流等も含め緊密なものがあり、ウィーンには
多くの日本人が在住していることもあって、
日本語学科も設けられている。日本からは、
エラスムスプラス (Erasmus+) などのシス
テムを利用して、法政大学、一橋大学、独協大学、桃山学院大学など多くの大学がウィーン
大学と協定を結んで留学生を送っている。例えば独協大学では、2003年に相互の学生交換を
含む学術交流協定を、独協大学外国語学部とウィーン大学ドイツ語ドイツ文学研究所との間



ウィーン大学本部棟（リング通り正面）



ウィーン大学壁面のブルックナーのレリーフ



ウィーン大学文化学部の建物と桜

で締結している。駐日欧州連合代表部(Delegation of the European Union to Japan)のホームページにもシステムの詳細が掲載されているが、例えば修士課程のジョイントディグリー取得では、エラスムスプラスあるいはエラスムス・ムンドゥス (Erasmus Mundus) のプログラムに応募することで、欧州2カ国以上の大学に留学し、最高25,000ユーロの奨学金も受けることができる。

この大学の学期は、冬学期が10月から1月、夏学期が3月から6月という2学期制で、ウィーンはドイツ語圏であることから、主要な第2外国語である英語の習得のため、英語教育センターが設けられており、今回のテーマである CLIL の実践が行われている。

筆者は、ウィーン市立公園の桜がちょうど満開の2016年4月、このウィーン大学を訪問し、International Office を訪問すると共に、CLIL 実践の中心的人物であるクリスティアーネ・ダルトン＝プファー (Christiane Dalton-Puffer) 教授に面会して、その教育方法についてお話を伺った。その内容は、文献1にも記載されている通り「英語を使いながら学び、学びながら使う」「英語を、教科を学ぶ手段として用い、無理のない教材や手段によって自然に身につける」といった、学生がいきなり英語にとまどったり恥ずかしさを覚えたりすることが少ないようなやり方であった。もっとも、欧州の学生にとって英語は、日本人と比較すれば、おそらくそれほど母国語とかけ離れたものではなく、例えば、筆者がパリのパスツール研究所に滞在した時分も、2週間ほどフランス語学校に通ったという英国から来た研究者が、フランス語を普通に話していたので、事態は日本人ほど深刻ではないに違いない。その意味で、この CLIL はむしろ我々日本人にとって大変に必要かつ重要な授業スキルであると思われる。Dalton-Puffer 先生の教室の大学院にも東京から日本人学生が留学に来ていて、日本における CLIL の活用について研究を行っているとのことであった (希望があれば本学からも留学生を受け入れてくれるとのことである)。日本における CLIL の受容とその現状、さらに科目における英語授業への具体的活用方法については次項で述べる。



Dalton-Puffer 教授 (就実の英語版パンフレットを持っている)

この CLIL には、「4つのC」と呼ばれる構成要素がある。それぞれの構成要素は、とりたてて珍しい、あるいは革新的なものではないが、科目の英語授業において、これらを有機

的に統合することが CLIL の特長であるということになる。4つのCとは「内容 content」「言語 communication」「思考 cognition」「協学 community」である。この4つが協調するように、英語教材を用意して授業を組んでいけば、間違いなくその授業は CLIL class となり、学ぶ学生は CLIL student となって、彼らは自然な流れの中で英語を習得し、グローバル人としての一歩を踏み出すことができるのである。

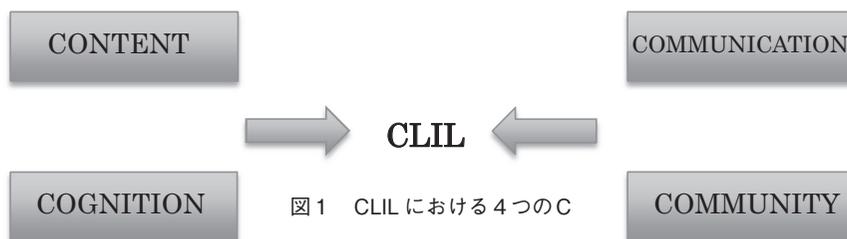


図1 CLIL における4つのC

2. CLIL による教育グローバル化の実践

さて、欧州言語に比べて、英語とその体系が大きく異なる日本語を使用する我々にとって、読む、書く、聞く、話すという英語の4要素を、特に社会人として専門的分野の中で駆使することには相当の努力の積み重ねを必要とする。

近年、社会の不安定化やわが国を取り巻く周囲の情勢などから、想定外の事態にも対処できる「問題解決能力のある人材」、さらに国際的な視野を持って活躍できる「グローバルな人材」が求められている。大学の役割にも、このような人材を育成することに重点が置かれるようになり、2012年の「大学教育の質的転換」を求める中教審の答申以来、アクティブラーニングの推進、インターンシップの促進、大学ガバナンスの強化、キャリア教育等による社会人力の育成など、多くの課題が大学には課せられるようになった（文献2）。また、国際的な人材を輩出するための教育のグローバル化は、初等中等教育からの課題と考えられている。文部科学省は学習指導要領の改訂を行う予定で、小学校5、6年生へ正式教科として英語導入を行い、中学では英語授業の導入を推進しようとしている（新指導要領は小学校では2020年度から実施）（文献3）。日本英語検定協会による英検 JR. 学校版のような小学校向けの英語検定も行われており、こうした状況の中で、大学におけるグローバル人材教育の拡充は急務となっているのである。

大学での、留学生の相互交流においてよくあるケースは、交流協定を締結して留学生を送り出しているが、先方からの留学生の受け入れが進んでいないという状況である。これは日本側の大学の教育体制に問題があることが多く、具体的には、N1レベルの日本語教育の実現が理想的だが、その習得には時間もかかり、また、大学で行うにしても委託するにしても多くの費用が生じるため、むしろ現実的な選択は、科目における英語授業の開講を行うことであろうと考えられる。そのためには、教員による全面的な英語授業科目を必要単位数だけ

開講する必要がある。できれば明日からでも、すべての授業を英語で行うようにすればよいのかも知れないが、事はなかなかそう簡単にはいかない側面を抱えている。多くの大学教員に即、英語授業を行う能力があるのか？また学生がそのような授業についていくことができるのか？等、問題点は多い。専門性の高い大学の授業において、特に資格試験等を目指す学部等においては、簡単に英語授業には切り替えられない事情もある。こうした困難な諸様相の中で、比較的容易に教育のグローバル化を推進する切り札が上で述べた CLIL なのである。

CLIL は、既にわが国の多くの大学に受容されて、日本における主要な第2外国語である英語を教科授業へ取り入れるために、ある意味、欧州の CLIL を取り入れながらも、日本における英語の難しさを加味した日本版 CLIL として実施されている。文献4には、CLIL in Japan として、東海大学、東京工業大学、神戸大学の例が紹介されているが、東京工業大学では、専門授業の英語化を目指しており、日本人教員が英語で授業を行うために、ネイティブの教員によるトレーニングコースなども開講されている。

日本における CLIL 受容の草分け的存在である上智大学では、大学教育の活性化を目指して、教育イノベーションプログラムを2009年度から実施し、この中で、CLIL を中心とした英語教育プログラムを各学部において実施した。また、海外から著名な CLIL の指導者を招き、トレーニングコースなども開催している。上記の教育イノベーションプログラムの成果は、3冊の CLIL 実践用の参考書としてまとめられて、上智大学出版から



上智大学の CLIL 教本（全3巻）

刊行されるに至っている。今年の夏に上智大学言語教育研究センター長の吉田研作先生（英語教育や各種英語検定試験の分野で著名な先生である）をお訪ねした際にも、各学部における CLIL 推進の成果であり教科書でもあるこれらの本をぜひ一度読んでみるように薦められた（本は同じ建物の書籍部で販売されていてすぐに手に入った）。第1巻は「原理と方法」、第2巻は「実践と応用」、第3巻は2015年から2016年にかけてまとめられたもので「授業と教材」と題されたものである（文献5）。ちょうどこの頃から、海外や日本において、CLIL をベースとする様々な展開や応用が試みられるようになり（ゲームや演劇への適用、算数学習への応用など）、CLIL の新展開と呼べるような新しい時代が到来している。筆者も次の項で、CLIL の応用の一案について紹介を行うが、上に述べた Dalton-Puffer 先生にお会いした時に、CLIL の教材の一つとして、筆者が授業で試みている反転授業の導入を提案したところ大変興味を持たれていた。当日、ランチをご一緒した時に、先生から反転授業についていろいろと質問を受けて、筆者の英語で一生懸命説明をしたのはよい経験であった。例えば、反転授業における内化としての学外におけるビデオ学習で、英語教材あるいは英語と日

本語のハイブリッド教材を提供しておいて、そこで提示された課題に対して、学校の授業ではグループ学修で討議し、英語で発表するというような進め方になるわけだが、この方法も、ある意味、発展的な CLIL、CLIL の応用形と言えるのかも知れない。この授業プランの効果については、ぜひ一度実際に検証をして、またその結果を Dalton-Puffer 先生に報告したいと思っている

さて、CLIL の実践方法の話に少し入りかけてしまったが、実際の教科授業ではどのようにして CLIL を実践するのか？という疑問について、少し具体的に説明してみたい。筆者は教養科目の授業で以下のようなことをやっている。対象は主に 1 年生の学生で、いろいろな学部から参加している。食の安全、放射線、感染症、環境問題など、グローバルなサイエンスに関する様々な話題を提供して、学生に野外学習やグループ討議も行ってもら参加型の授業である。環境問題の話のところ、話題を「地球温暖化って英語で何て言うのかな？」と学生に振っていくと、しばらく考えていたある学生から「hot earth? ですか？」という答えが返ってくるが「それじゃあ地球が沸騰しているみたいだね」というと皆、大笑いをするが、なかなか正解は出てこないで「正解は global warming です」と言って下記のスライドを見せる。

地球温暖化

global warming

環境問題

environmental problem

化石燃料

fossil fuel

京都議定書

Kyoto Protocol

パリ協定

Paris Agreement

これが CLIL の第一歩である。「こういう英語は知っておかないとグローバルな話題が出た時に困るよ」と言うと、次に、学生から「先生、〇〇は英語で何て言うんですか？」という反応が出てきたらしめたものである。毎回このような話題を振って英語に慣れた頃に、今度は、何回目かの授業でネイティブの教員に少しだけ参加してもらって、地球温暖化について英語でトークをしてもらい学生には英語で質問してもらおう。そして、最終回にはグループ学修の成果を英語で発表してもらおう。この頃には、学生達は、かなり英語に慣れて抵抗感はなくなっているので、自然と英語のプレゼンに取り組むことができる。こうして、授業に英語を導入するという当初の目標はある程度達成され、学生もこのような授業を当たり前と思う

ようになる。このようなハイブリッド型授業が成功すれば、完全英語の授業も教員の能力が伴えば不可能ではなくなると思われる。

いろいろな要素を計画的にうまく統合することがCLILでは重要である。そのためには、英語の教材、視聴覚資料等をうまく作成、準備して、15回の授業の中で効果的に使用し、またグループ学修や発表も取り入れることで、学生は、もちろん教科はしっかり学修して、その上に英語の心得を習得することができる。もちろんCLILには様々な方法やスタイルが存在するが、大切なことは、より多くの教科でより多くの教員がこのような授業を行うことで、学内にグローバルな雰囲気や英語環境が醸成されるということである。グローバル化と一言で言っても、これは数日で達成できるものではなくて、こうした努力の積み重ねによって初めて達成されるものである。仕事や手間が増えるのは覚悟の上で、教員も取り組まなければなし得ないものであろう。他にも、単なる語学能力だけでもグローバルな視野は開けないので、国際的視野や感覚を養うために、国の名前（アメリカはthe United States of America、イギリスはUnited Kingdom of Great Britain and Northern Irelandなど）や地図（国際的地図は英国が中心に描かれていて、日本は東端のアジア地域にあるから極東Far East、そんなイメージで欧米からは見られている）、さらに研究の話（大発見をしても日本人だけで書いた学術論文は信用してもらえなくて受理されない）など、いろいろな話題を授業の余談で話していくと、総合的な要素がCLILに取り入れられて、CLILの価値をより高めることにつながっていく。その意味で、CLILはまだまだ発展途上なのかも知れないし、多く改善や変更の余地があるようにも思われる。

3. CLILとビブリオバトル

前項で、CLILの発展型や進化型に関する話題に少し触れたが、反転授業の導入やVOD教材との融合など、CLILにはまだまだいろいろなやり方が考えられるし、今後、教育現場の様々なニーズに答えていくことも可能であろうと思われる、その一例をこの項で示したいと思う。それはビブリオバトルを利用したCLILである。

ビブリオバトルは、京都大学工学部出身の谷口忠大先生によって考案された知的書物紹介ゲームである（文献6、7）。現在、ビブリオバトル普及委員会によって紹介、普及が行われていて、公式ルールに基づいたビブリオバトルが毎日全国の学校や図書館などで開催されている。本年12月には京都大学で全国大学ビブリオバトル2016京都決戦が開催されるが、現在、全国の大学で、この京都決戦出場を目指して、学生による熾烈な予選が繰り広げられている。筆者は、最近、ビブリオバトル普及委員会の会員となり、本年結成された就実ビブリオバトルクラブ（就実BBC）のアドバイザーの一人として、中国ブロックのこの予選に聴衆として参加している。



図2 ビブリオバトルの手順 (東京都立多摩図書館作成 ビブリオバトル公式サイトより)

ビブリオバトルについて簡単に説明すると、まず、本の紹介者（パトラー）は、紹介する本について資料やスライドなしで5分間ライブのプレゼンをする。その後1-2分会場からの質問時間があって、パトラー全員が終了したら、最後に聴衆は自分が読みたいと思った本に投票をする。この投票で最高得票を得た本がチャンプ本となり、発表者はチャンプ本獲得者となる、というものである。ビブリオバトルは図書館や公共機関で広く行われているが、学生が取り組む場合、特に、プレゼン能力が養われる、本を読むようになる、といった大きな教育効果も期待され、社会人力を持つ学生を育てるのに非常に有意義な取り組みであると注目されている。先日も、上記の全国決戦出場を目指した4人の本学学生が出場して、大学内の予選（地方予選）が開催された。出場した学生のパトラーは、いずれもよく練習もして高レベルの争いになったが、投票の結果、1名の学生がチャンプ本紹介者となり、大学間で代表者を決める、さらに上のレベルの予選会（地区決戦）に出場することとなった。

このビブリオバトルは、活字を読んで考えをまとめていく点でNIE（新聞を用いた教育方法）とも通じるところがあり、事実、新聞を題材にしたビブリオバトルも開催されているとのことである。さらにビブリオバトルは、様々な方法により、教育現場への応用や取り入れが期待されるが、1つの方法として、上述のような英語によるビブリオバトルを実施することが可能であろう。特に少人数授業の場合、授業の中で英語教材を提示して、その中から紹介したい本を選んで、英語でビブリオバトルを行う等の方法が考えられる。この際、紹介する本は授業のテーマに関連したものになるかも知れないが、それは差し支えない。このような試みがなされた場合、これは、まさに科目授業における発展的CLIL実践の一例として記録されるべき試みとなるであろう。就実ビブリオバトルクラブの次の課題として、この発展的CLILにもぜひ取り組んでいきたいと考えている。

謝辞

本稿の作成において有益な示唆をいただきましたウィーン大学 Dalton-Puffer 先生と上智大学言語教育研究センター吉田研作先生にこの場を借りて感謝いたします。また有益な資料等をいただきました Laurence Dante 先生、並びに野村照代氏に感謝いたします。さらにビブリオバトル京都決戦予選の実施にあたり、ビブリオバトル普及委員会中国ブロック世話人の先生方、並びに就実ビブリオバトルクラブ アドバイザーの先生方に大変お世話になりました。この場を借りて感謝いたします。なお、CLIL 等を含む学内英語環境の醸成については、国際交流委員会ワーキンググループの先生方と共同で進めています。

参考文献

1. Dalton-Puffer C. Content-and-language integrated learning: from practice to principles? *Ann Rev Appl Linguist* 31, 182-204, 2011
2. 中西 徹 主体的学びを活性化する反転授業とそのキャリア教育への展開 *就実論叢* 45, 177-190, 2015
3. *Between* No.270, 10-11号, 2016 Benesse
4. CLIL IN JAPAN Institute of Continuing and TESOL Education, The University of Queensland, 2016
5. 渡部良典 池田 真 和泉伸一 CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たななる挑戦 第1巻 - 第3巻 2011-2016 上智大学出版
6. 谷口忠大 *ビブリオバトル* 文春新書 2013
7. 谷口忠大 粕谷亮美 *ビブリオバトルを楽しもう* さ・え・ら書房 2014